

令和5年度 第1回鶴岡市総合教育会議 会議録

I 会議結果

- 日時 令和5年7月27日(木)午後1時30分～3時5分
- 場所 鶴岡市役所 本所3階 庁議室
- 出席構成員
- | | |
|----------|-------|
| 市長 | 皆川 治 |
| 教育委員会教育長 | 布川 敦 |
| 教育委員会委員 | 百瀬 克浩 |
| 教育委員会委員 | 清野 康子 |
| 教育委員会委員 | 中村 公俊 |
| 教育委員会委員 | 齋藤 美緒 |
- 出席関係者
- | | |
|---------|-------|
| 副市長 | 阿部 真一 |
| 総務部長 | 森屋 健一 |
| 企画部長 | 上野 修 |
| 健康福祉部長 | 佐藤 繁義 |
| 藤島庁舎支所長 | 成田 讓 |
- 傍聴人 10人
- 事務局
- | | | |
|-----|----------------|-------|
| ・進行 | 教育委員会教育部長 | 永壽 祥司 |
| ・説明 | 教育委員会管理課長 | 清野 健 |
| | 教育委員会学校教育課長 | 今野 新一 |
| | 教育委員会学校教育課指導主幹 | 渡邊 智 |
| ・庶務 | 教育委員会管理課課長補佐 | 奥山 真裕 |
| | 教育委員会管理課庶務係長 | 長瀬 陽彦 |

II 会議次第

- 1 開会
- 2 挨拶 市長、教育長
- 3 協議
 - (1) 教育を通じた「子育て世代に選ばれる」地域づくり
 - ①鶴岡型小中一貫教育について 資料No.1-1～3
 - ②藤島地域教育振興会議について 資料No.2-1～4
 - ③こどもの「あそび場」についての現状・課題 資料No.3-1～3
 - (2) その他
- 4 閉会

II 会議録（3 協議 会議録）

（教育部長）本日の会議は、最初に教育委員会から、鶴岡型小中一貫教育、藤島地域教育振興会議について説明し、次に健康福祉部から、「こどものあそび場」についての現状と課題を説明する。その後、教育委員会、市長の順にご意見を頂く。それでは、鶴岡型小中一貫教育について事務局より説明をお願いします。

（学校教育課長 ）資料No.1 - 1～3 を説明

（教育部長）続いて、藤島地域教育振興会議について事務局より説明をお願いします。

（管理課長）資料No.2 - 1～4 を説明

（教育部長）本日のテーマである子育て世代に選ばれる地域づくりとして、学校を中心に説明した。次に、健康福祉部より、子どもの遊び場の現状と課題について説明をお願いします。

（健康福祉部長）資料No.3 - 1～3 を説明

（教育部長）説明事項は以上であり、続いて意見交換に入る。最初に教育委員会側から伺う。教育長からお願いします。

（教育長）子育て世代から選ばれる教育ということで難しい協議題と感じる。昨日、総務省が発表した都道府県の人口推移では、全国学力学習調査の全国1位、2位の秋田県、石川県、福井県が全て人口減となっている。つまり学力向上だけでは魅力ある学校、教育にはならないのではと感じる。また、秋田県の佐竹知事は、全ての子育て支援に取り組んでも人口減は止まらないとコメントを出していた。さらに、山形県議会議員による座談会の新聞記事を読んだが、人口減少対策が最優先という大きな見出しが出ているにも関わらず、義務教育の魅力化に言及されている方はほとんどいなかった。最上地方の議員の方は、小中学校の地域学習の充実として、ICTの充実について多く触れていたようだ。だからこそ、本日の議題は逆に私は意味があると感じる。鶴岡の子ども達に夢のある、よりよい学校教育、地域教育を横断的に提供する鶴岡型小中一貫教育は、よりよい教育環境の一つのツールであり、システムとして全市で小中一貫教育を実践していくことが魅力化につながると考えている。もちろん、この小中一貫教育が魔法の杖ではない。小中学校の先生がお互いを知り、お互いをリスペクトしていくことによって、子どもたちの成長にプラスになっていくと信じる。現在、学校訪問をしているが、コミュニティ・スクールをすでに導入している学校では、地域の方との会議で、小中連携から小中一貫に移行できるよう熟議を開始しているところもあり大変うれしく思う。都市と地方が人口を奪い合うのではなく、やはり地方自治体として子どもを産み育て、地域で仕事ができる環境をつくっていくことが必要である。2つ目の藤島地域教育振興

会議では、何度も協議を重ね多くのご意見をいただいている。会議を重ね集約の時期となっているが、藤島地域の皆様の生の声を多く聞かせていただいた。さらに、子どもたちの声や教職員の声も聞いてほしいという声もある。それを実施し子ども達がこの学校なら行きたいという学校づくりを目指していきたいので、ぜひ更なる応援をお願いを申し上げる。3点目の子どもの遊び場について、学校現場では外遊びを非常に重視している。そのため、子ども達が学年関係なく、1年生から6年生、または中学校1年生から3年生までが、異学年同士で色々な遊びをすることは、非常に大事なことである。学年の枠を超えた遊びができ、いつでも使えるような施設が各地域にあると非常に良いと考えている。また、乳幼児を抱える保護者の方々にとって、いつでも使えるところがあれば良いと思う。ベビーカーで子ども達を連れて行きながら遊べ、雨の時は外ではなく中に入れるような遊びの施設があれば、それに越したことはないと思う。財政上の問題もあるので、全て作ることは不可能だと思うが、そのような施設を各拠点ごとに作っていくことも大事と思う。やはり保護者にとって選択できる場所をいかに我々が提供できるかが大事である。私は西部公園で毎日ウォーキングをしているが、夜中までバスケットボールしている高校生や中学生もいたりする。また、夜に、ウォーキングやランニングをしてる人がかなりいる。午後9時過ぎて中学生がいれば早く帰るように促しているが、このような需要はあると思っている。休みの時は、西部公園の駐車場が足りなくなり、八重桜のところの周りの道路に車が並んでいる。夕方はドッグランをしている方々もいて色々な活用がされていると思う。子どもだけでなく、市民の皆さんが使える遊び場が必要ではないか。子どもだけでなく大人も遊ぶ必要があると感じている。何より、愛情をたっぷりに自然豊かなこの鶴岡の町で、のびのびと遊び、そして育てることが、子どもにとっては一番大事なことと思っている。様々な角度から建設的なご意見を委員からもいただけるとうれしい。

(教育部長) テーマの小学校中学校、藤島地域の状況、遊び場についてご意見をいただいた。次に教育委員会委員からご意見をいただきたく、順次ご指名する。1番委員の百瀬委員からお願いする。

(百瀬委員) 私も、本日のテーマである子育て世代に選ばれる地域づくりは大きなテーマだと思う。『複住スタイル』というサイトに、子育てを中心に考える移住のメリット、デメリットが挙げられている。子育ての移住でメリットとして捉えられているのが、自治体としての子育て支援が手厚いことが1つ。2つ目に保育園の待機児童問題が少ないこと。そして3つ目に自然の中でのびのび子育てができることを挙げられている。デメリットとして一番は教育に関連して、学校や習い事を選択肢が少ないこと。次に、公共交通機関が少ないこと、そしてアミューズメント施設が遠いことが挙げられている。言うまでもなく、子育て世代にとって、子ども達を健やかにたくましく成長させてくれる教育環境が最大の関心ごとの1つであり、子どもの望ましい成長の必要条件となっている。親が考えることは、子どもが心身ともに健全に育つことが一番の願いということを改めて思った。その中で、これからの教育として小中一貫教育の説明で触れられていたが、これからの教育を考えていく上で、教育に求め

られているものが、時代とともに、また、社会情勢の急激な変化とともに変容してきている。それが、全国で小中一貫教育が進められている背景であり、教育内容の量的、質的充実への対応が求められている。現在の指導要領では授業時数を実質的に1割程度増加させるなど、教育の質量ともに充実させる必要性がある。また、社会情勢の急激な変化と対応への必要性により身につけるものが多く求められている。2つ目として、児童生徒の発達の早期化などへの対応として、発達が昔と比べて早期化しており、従来の中学校段階の指導の特質とされていたものが、一定程度、小学校段階に導入されてきている。また、経験的理解で対応できる学習内容から、理論的・抽象的な理解が必要な学習内容への円滑な橋渡しなどに対応するために、学年段階の区分などの見直しの検討が求められている。さらに中学校進学時の不登校、いじめの急増、中1ギャップへの対応が必要である。4つ目に、少子化に伴う社会性育成機能の強化の必要性であり、少子化で交流機会が少なくなっていることが言われている。このことに加え、本市における少子化の進展、若者世代の県外流出など、教育環境の低下や地域活力の衰退という中でいろいろ考えられていることと思う。少子化により、近い将来、特に市街地区の様々なデータを見るとクラス数の減少、複式学級の増加、また学校規模の縮小、教職員配置数減少などにより、これまでの教育環境の維持が困難になる学校が出てくること危惧されていることから、新たな教育体制の構築により、教育の充実を検討していくことが、今まさに求められている。教育の充実に向けて有効な実践例等で求められているのが、この小中一貫教育と捉えている。少子化の進展、社会情勢の急激な変化等により、子ども達に求められている能力・資質の変容について、従来の教育だけでは対応できない教育課題の表出が見られている。このような教育課題に対応する上で、有効な教育体制として小中一貫教育が導入され、特に中1ギャップの緩和に関連する成果や、学年・学校の枠を超えた継続的な指導が必要な項目、教職員の意識改革に係る事項について、大きな成果が挙げられていることから、本市の教育の発展と持続的な教育環境の構築を見据えると、これまでの小中連携教育からステップアップさせた小中一貫教育の令和7年度からの推進は、今後の持続可能な教育環境の構築という意味でも大変期待の持てる施策と捉えている。一方、小学生世代のリーダーシップを発揮する機会の減少、移動時間の確保、また小中一貫校で学校が離れているケースについては教職員の負担の軽減や負担感・多忙感の解消、研修や打合せ時間の確保など、小中一貫教育を推進する上で解消を図っていくべき課題も認識されている。先進県、先進校などの実践例を参考に、実態に即した対応を検討していく必要があると思う。藤島地域の文厚エリアの整備については、児童生徒数が減少し、従来の教育環境の維持が非常に困難なことが見込まれる。そして学校施設の老朽化、藤島中学校は本市で2番目の古さで、築50年以上が過ぎていると聞いているが、それに追随するように各地区の小学校も老朽化が進んでいることから、藤島中の改築と合わせた地域の教育環境整備構想の検討というのが求められ、それを今、進めている状況である。藤島地域教育振興会議の設置については、地域住民と行政の協働で教育のあり方の検討を丁寧に進めていることで、自分ごととして次代の地域の担い手、創り手となる子ども達の教育のあり方を考える大変良い機会になっている。余談だが、学校再編整備の中で学校の存続が非常に危惧されている自治体に居たことがあるが、地域の方々が学校の廃校によって非常に危惧されているところは、地域から学校がなくなる

と、地域で子どもたちの姿が見ることがなくなり、地域活力の喪失につながることを非常に不安視していることをお聞きした。これから藤島地域で進めるにあたり、地域住民の理解を丁寧に図っていきながら進めていく必要があると思う。どのような教育環境であれば、子ども達に求められる資質能力の養成をしっかりと進めていけるのかを考えて、最終判断をしてもらいたい。また、将来的にモデル事業として、本市の小中一貫教育推進の一助となるような実践を期待したい。子どもの遊び場に関しては、遊び場の不足や整備要望、遊具更新等の声が多く寄せられているとのことである。資料では、ソライの利用者は、民間施設ということもあるが、児童館を合わせた数よりも多いことから、遊び場に必要なアミューズメント感、わくわく感のような魅力がソライではうまく伝わっているのではないか。今後の施設整備にあたり考えながら進めていただきたい。整備していく上では安全性、快適性は何よりも大切なことで、老朽化が進んでいることもあるが、特に、天災として大雨や地震で倒壊となれば大変なことになるので、その点を整理していただきたい。また雪国である特性から、通年で遊べる屋内施設を充実させていただきたい。地域性を生かした屋外施設として、中山町にヒマワリの迷路があるが、鶴岡なりに、そのようなものもあれば、遊び場の選択肢が広がっていくのではないか。県内で唯一、人口が増加している東根市では、さくらんぼタントクルセンターを34億円で整備し子育て支援を進めている。さくらんぼタントクルセンターについては、子育て世代への支援として整備に多額の費用をかけている。それをどのように実現したかだが、東根市長は人員整理削減をある程度のスパンで進め、それによって50億円を拠出し、東根市民には1円も負担を課することないということを言われていた。また、東根保育園を民営化することで4,000万円程度を削減し、その財源で、所得制限無しの未就学児の医療費無償化を実施した。どの自治体も限られた財源で決して潤沢ではないと思うが、東根市を1つの例として、子育て支援を進めていくにあたり自治体として様々工夫をしながら取り組めば、子育て支援が充実し、将来的に選ばれる地域になるのではないか。

(教育部長) 次に、清野委員から願います。

(清野委員) 私は、子育てが終わった母親だが、お母さん目線で、選ばれることを意識しながらお話しする。1つ目の小中一貫教育に関してだが、これは選ばれる選ばれない関係なく、9年後の姿を学校、家庭、地域で共有することが大事である。コミュニティ・スクールもあるのでとても大事と感じる。以前、資料にあった小中一貫教育の骨子で、一貫教育は目指す子ども像を共有し、9年間見通した教育課程を編成することで、系統的な教育活動を実施できるとある。骨子の基本方針に、ふるさと学習、外国語教育、ICT活用教育が述べられている。私の子どもの時は、外国語教育、ICT活用教育がなかったので、保護者としては羨ましいと思う。ただ、これをやったではなく、9年間で終わり、卒業時にこれが身につく、例えば、社会に出て役立つスキルになることは難しいと思うが、そこまで近づけることを特色とすることは大事と思う。系統的に教育課程を編成することができるのであれば、5、6年生からの英語ではなく、例えば、1年生から始めることなど、最終的に子ども達がこれができたとか、これが自慢できるなどがあれば良いと感じる。また、今こそ藩校致道館の教えを大事にする

というのはどうか。オックスフォード大学のマイケル・オズボーン教授が2017年に発表した2030年に必要とされるスキルとして、戦略的な学習が1位になっている。抽象的で分かりにくく色々な解釈があると思うが、新しいことを学ぶ際に状況に応じて最適な学習方法を選び実践するスキルと言われている方がいる。イコールではないが、藩校致道館は自学自習の教えを大事にしている。これは自ら学び、自ら考え学ぶことと言われている。これまで鶴岡市内の学校では、自学自習は大事にされているが、今こそ、今だから改めて、2030年に必要とされるスキルという意味で大事にしていこうと感じる。2番目の藤島地域振興教育振興会議についてだが、より具体的に一体型の学校が望ましいと思っている。その理由は3つあり、それぞれの中学校のみならず小学校の老朽化も挙げられていることから、一体的に整備することが望ましい。また、その方が、より9年後の姿が共有できると考える。もう1つは、保護者の方の負担としてPTA組織を考えたときに、小学校と中学校が別々の場合、一家に小学生と中学生がいれば、PTA活動として、小学校と中学校に2回行かなければならないが、1年生から9年生までと考えたときに負担が減る可能性がある。私もPTA活動に携わったが、会議に出る回数が減るなど負担軽減につながるのではないかと考える。藤島地域で進めていくことを考えた時に、系統的な教育や独自の教科設定など小中一貫校や義務教育学校にした場合に取組むことができる。例えばの話だが、名称は別として、藤島地域は獅子踊りが数多く残っているので、例えば芸能科を設定し、今後の保存が危惧されているかと思われるが、保存や担い手の育成ができる。また、魅力があり選ばれるという意味で、地域の方に対しては、獅子踊りを保存し担い手を育成するということがあり、一方で、海外に向け英語で、藤島の獅子踊りをプレゼンテーションすることができるようになれば、それを通して英語とプレゼンテーションのスキルが身につくことができるのではないかと考えた。子どもの数が減っているのに、地域の人や多くの大人と関わることでコミュニケーションの機会も増える。先ほどの2030年のスキルの話だが、対人スキルがとても大事で、必要と感じる。多くの人や大人と関わることで対人スキルを学ぶことができると考える。また、藤島地域に水田農業研究所があり、つや姫、雪若丸の発祥のようだが、加えて、庄内農業高校もあるので、これらと連携し、例えば、食物科を作ることで、つや姫や雪若丸について学ぶだけでなく、例えば1年生から9年生まで一緒に調理し月1回食べることで、9年間の間に自分でご飯が作れるようになるかもしれない。また、農業担い手不足が懸念されているが、農業に興味を持つ機会になるかもしれない。また、つや姫は海外でも人気のある米なので、英語でつや姫について説明ができるようになるなど、プラスアルファのスキルが卒業するまでに身につくのではないのかなと考える。何より大事なことは、地域の意見を吸い上げることと丁寧な説明は忘れないようにしていただきたい。3つ目の子どもの遊び場についてだが、お母さんや私もそうだが、遊び場がなく行く所がないと言った時、アミューズメントパーク的なものをどうしても示しがちである。保護者が考える遊び場という場合は、例えば、遊具があったり、ソライのようなクリエイティブな遊びができたりするところを指す事が多いと思うが子どもの視点は別だと思う。私が子どもの時に遊具があった所で遊んでたかというのと、そうではなく神社や寺など、遊具がなくても遊んでいた。実際、子どもは大人が考えているのと違い、何をしても遊ぶことができる。また、どちらかというといまでは危険といわれる遊びとして、木登りを

したり記憶がある。ただ、今は大人はリスク回避をしようとするので、リスク回避を重要視する余りに遊具が撤去されることが多いのではないかと思う。何でも危険ということで排除するのではなく、リスクにチャレンジする環境を残すということも大事なのではないか。

3つ目として、選ばれるという視点では、仮に、首都圏など大都市圏の人たちを呼び込む場合はまた視点が違い、そのような方は、自然が多くて、自然の中で遊ばせたいという視点があるのではないか。4つ目として、日常的に遊べる場、そして、それとは別に大人と一緒に遊ぶところという考え方もあるのではないか。どのような施設が良いのかは分からないので、チャット GPT に質問してみた。どんな遊びを子どもが求めるのかと聞いた時に、1 多様性と挑戦、2 自由な遊びの空間、3 友達との交流、4 安全性と清潔さ、5 季節や天候に対応した遊び、6 親との交流スペース、7 創造性を刺激する要素とのことだった。次に、保護者が求める子どもの遊び場と聞いた時、1 安全性、2 遊具の多様性と適切な年齢に応じた設備、3 インクルーシブな環境、4 整備された清潔な環境、5 監視体制と安心感、6 教育的な要素の取り入れとの答えだった。網羅するのは難しいと思うが、ポーネルドというおもちゃの会社があり、世界のおもちゃを販売している。ホームページで調べたところ同社は多くの自治体や小学校の遊び場をプロデュースをしている実績がある。都会では、ポーネルドは伊勢丹などに入っているので、一つの目玉になるのではないか。都会の方は別の視点と言ったが、プレイパークというものがあり、従来の公園にあるような既成のブランコ、シーソー、鉄棒があるような遊び場と違い、子どもたちが想像力で工夫して遊びを作り出すことが出来る遊び場で、世田谷区に羽根木プレーパークがオープンし、この言葉が広く日本で知られるようになった。ここでは、子どもたちが自由に遊ぶためには、怪我や事故は自分の責任という考え方が基本である。冒険心をかき立てる楽しい遊びも、事故が多くなるとできないことになる。ポーネルドのような会社に聞いてみることで、プレーパークも色々なやり方があるようだが、プレーパークについて知っていただきたい。資料にあったが、児童館はどうしても学童施設と一体となるようだが、逆に自由来館はしにくくなるのではないか。中央児童館は行きやすいと思うが、南部児童館は学童のお子さん達が多く、遊びに行ける感じではないので、もう少し自由来館ができる施設が欲しい。また、中学生、高校生が来場してもいいのではないか。それには一定のルールなどを学習してもらう必要があると思うが、小さい子どもたちの面倒みるとか、そのようなことがあってもよいのではないか。子どもの遊び場だが、総合計画のキャッチフレーズは「毎日おいしい。ここで暮らしたい」なので、子どもたちにとって遊び場が、毎日おいしいここで遊びたいという施設があれば良い。一番大事なのは、今子育てしてるお母さん、そしてこれからの子育てしていく世代のお母さん、お父さんのニーズをしっかりと捉えて、無駄にお金使うことのないように、良い施設を作っていただきたい。

(教育部長) 次に、中村委員から願います。

(中村委員) 鶴岡型小中一貫教育と藤島地域教育振興会議は根幹が同じ一本でつながっていると捉えている。出生率の低下による人口減少と少子化が進んでいることは、全国的に明らかで、それを踏まえて、小中一貫校の開設の必要性和意義は理解されていると思う。ただ、初めて

の試みであり、不安を感じるのは当然で、その不安も未就学児、児童生徒の保護者と既に小学校、中学校を卒業された地域の住民の方々では、不安を感じる点にも違いがあると思う。例え少数でも不安や疑問があった場合は、引き続き丁寧な説明で解決して進めていくということが大事である。また、声を上げることができない人もいると思う。なかなかそのような機会に出かけにくい人もいると思われるので、そのような方の声を取りこぼししないよう配慮が大事である。何を求めているか、何が不安に思っているかを、保護者、地域住民と同じ目線で考えて進めていくことによって魅力あるまちづくりにつながっていくと信じるので、よろしくをお願いしたい。子どものあそび場について、遊びに行く時に今日はどこに行くか選べるように選択肢がたくさんある方が嬉しいと思う。天気の良い時、悪い時や、体を動かそうという時に選択肢になるような遊び場を選べる贅沢さが欲しい。財源の問題もあり難しいと思うがそのような環境を期待する。私の子どもが小さい時に、休みにどこに連れて行くかと思った時、子どもの喜ぶ顔を見たくて連れて行き、私自身もそれが楽しみだった。子ども達の笑顔が溢れるような感じの遊び場を、いろいろ選択できる状況になると素晴らしいまちになっていくのではと思う。

(教育部長) 次に、齋藤委員から願います。

(齋藤委員) 私は小学生と中学生の子を持つ親の立場でお話します。先ほどの説明にあったように鶴岡市が抱える課題と一致することが多く小中一貫教育を導入することに共感する。課題として、子ども達の社会性を育てる時に、大人的生活スタイルが昔と様変わりしたことが原因と言われている。地域でのコミュニケーション、大人と子どものコミュニケーションの他に、子ども同士のコミュニケーションも取りづらいう状況になっていると学校現場を見て感じる。子ども達の間関係も、ある程度固定され、それが良いことに働くこともあるが、小さなことでトラブルから抜け出せないということが起きているようだ。小中ギャップも課題であったが、私はコミュニケーションの問題に関係があると思う。小学校から中学校に上がった時に、大人が想像できないところで悩んだり、小さなことで躓いたりしている子どもを何人も見てきた。これから進める鶴岡型小中一貫教育において大切にしたい目標、教育課程、活動、家庭地域の4つのつながりは必要なことである。異年齢の子ども達の関わり合いやコミュニティ・スクールを両輪とすることなので、地域の大人とも多く関わるができる環境を大人が作ることが大事である。藤島地域教育振興会議だが、今の内容を踏まえ、例えば、自分が複式学級が見込まれている地域の保護者だったらという立場でお話すると、1つの学校である程度の規模を維持した教育を受けさせたいと願うと思う。私は子ども時代に複式学級で学んだ経験者である。学校自体が実家のように居心地が良く、大自然の中でとても楽しい思い出がたくさんあるが、もう少しある程度的人数の中で切磋琢磨できていたら、もう少し違う自分がいたのではと、大人になって色々なところで感じる。藤島地域を限定にしたことではないが、昔は学校が小規模であったとしても地域の人との関わり合いが密で、家族の人数も多く、社会性も身に付いていったのではないかと思う。今は、家族の形もコンパクトになり、さまざま変化しているので、なおさら、今の子ども達を学校に通わせるとしたら、

ある程度の規模の中で育てたいと思う。子どもの遊び場について、私の経験談だが、先ほどプレイパークの話聞いた後に話しぶりどころはあるが、私の子どもが小さい時に遠出したが、子どもは車の中に長時間いると飽きてくるので、近くの見かけた公園やインターネットで検索して見つけた公園で、休憩がてら寄ることが結構あった。その公園ががよく整備され、きれいな所だったり、使いやすかったりすると、また行きたくなる記憶が残る。本日の議題は、子育て世代に選ばれる地域づくりであるので、遊び場を一番利用する世代が選ぶ権利を多く持っていると思う。その入り口として、藤島地域でも市内全体でも、市民が気持ちよく利用できるのはもちろんだが、観光客や他地域から来た人も使いやすく、きれいで良いところと思ってもらえることも考え、規模の大小関係なく、遊び場の環境を整えることが大事な要素ではないか。

(教育部長) 次に、市長からお願いする。

(市長) 鶴岡型小中一貫教育と藤島地域教育振興会議の検討状況の話があったが、皆様からの意見についてなるほどと伺った。学校は子ども達のためにある場所なので、質の高い教育を実現できるような鶴岡型小中一貫教育をしていただきたい。質の高い教育とは何かであるが、例えば、学力を考えてみると、鶴岡型小中一貫教育を導入した時に授業の理解度向上が期待されると説明があったが、具体的にどのようなことに取組むとどのようになるのかを考えていただきたい。平成26年12月の中央教育審議会の答申を参照としていることだが、小中一貫教育を実施していく教育委員会、学校現場の先生方が、どのようなことをすることによって、授業の理解度の向上について、鶴岡型小中一貫教育で表していくのかを1つ1つ具体化していただきたい。期待する声もあり、また、不安に思う声もあると思うので、丁寧に、また幅広い方々が関係してくるので、具体化をしっかりしていく必要がある。子どもの声を聞くことについて、こども基本法の中でもあるが、先生方の声もしっかりと聞き、どのような鶴岡型小中一貫教育にしていきたいのか、具体例が出てくると、より納得できることもあると思う。教育委員会でも、いろいろな場面があると思うが、例えば、教育長のもとに、若い先生方の研究会を作り、自分たちの働く場でこういう学校、こういう取り組みをして授業の理解度の向上を図るんだということを、また、鶴岡型小中一貫教育の中ではこうだということをぜひ聞いてみたい。場合によっては、学校が1つになることを考えると、コミュニティ・スクールと両輪で取り組むとのことだが、伝統芸能や伝統文化はどうなるのかなどの声に対しても、具体的にどうするのかということ、網羅的ではなく1つ1つ積み上げていただきたい。清野委員から9年後どうなるのかという話があったが、義務教育の本質について理解が不足しているところがあるかもしれないが、大学ではカリキュラムポリシーとしてどのようなことを学び、ディプロマポリシーという卒業時の質の保証ということになると思う。学力の向上といった時に、その考え方も塾と学校は違うと思うので、かつてのような一定の学力をという役割も依然として大切と思うが、子ども達がなりたいたい自分になれるような、そのような学力を活かして、どのような将来を描いて、それをどのようにアシストしていくのが学校に求められるのではないかと思う。そのようなところに踏み込み、今までの小中

一貫教育の模倣ではなく、致道館教育の話にもなったが、鶴岡型小中一貫教育を打ち出していきたい。次の、子どもの遊び場についてだが、最初のテーマとも重なるが、子どもと保護者の声を市長部局としてよく聞く必要があり、教育委員会でも聞いていただき、我々としてしっかり把握したい。バスケットボール、スケートボード、ボーンレンド、プレーパークについて話があったが、専門家のご意見も含めとなるが、今の子どもと保護者について、私たちが子どものときに求めていたものと、大分違ってきているのではないかと思うので、それが基本になると思う。私個人的には、野山で遊び、それしかなかったのが、遊び場という概念があまりない。自分の息子が東京で暮らしていたとき、カブトムシが捕れるということで連れてきて、カブトムシを捕ったり、釣りしたり、サッカーをしたり、そのようなことに喜んで過ごしていた。遊び場というものは、やはり本市も都市化もされ必要と思うので、市長部局としてしっかり取り組んでいきたい。例えば、身近なところがない場合には、市内循環バスなどを整備してとなるが、総合的な取組みが、若い世代、子育て世代のための環境整備には必要と思う。今、総合計画後期計画の見直し作業が進んでいるが、その中で中心市街地の将来ビジョンとして中心市街地における子ども達のあそび場について結論を出していく必要がある。また、藤島中学校の改築に合わせ、藤島の文厚エリアはどうなるのかについて、個別具体的なことも方向性と結論を得ながら、全体の方向性について、マクロとミクロと整合的に施策推進をしながら、この遊び場についても実行していきたい。

(教育部長) 他にご意見はないか。なければ、本日の総合教育会議を終了する。ご出席の皆様にご感謝申し上げます。